十一之巻

筑後川の戦い～其之壱～

1359（正平14）年、現在の福岡県久留米市を流れる筑後川を挟み北朝勢約6万、南朝勢約4万、計10万の兵が対峙。これが関ケ原や川中島と並ぶ日本三大合戦の一つ、筑後川の戦いの幕開けでした。

武光の知略と武政の奮闘で少弐頼尚軍に勝利

この戦いで菊池家15代当主・武光は、総大将である懐良（かねなが）親王のもと、見事な手腕で南朝方を勝利に導きました。その皮切りとなったのが、少弐頼尚（しょうによりひさ）との戦いでした。

自軍を耳納連山付近に留めた武光は、敵軍の情報を収集（左図①）。その情報をもとに、少弐頼尚の軍勢が布陣する対岸の味坂付近に向けて、5000人の決死隊に筑後川を渡河させました。それを知った少弐軍は、宝満川対岸まで退却（②）。

その後2週間近くにらみ合いが続き（③）、ついに武光が敵陣への夜襲を決意。当初、武光の長男・武政率いる300人の先発隊が敵の背後に潜み、本隊の侵攻に乗じて敵陣に火を放つ作戦でしたが（④）、敵の見回りに発見され、戦いの火ぶたが切られました。

それを察知した武光は、咄嗟の判断で本隊を5つに分け、正面と側面から攻撃。暗闇の中で混乱した少弐軍は、統率が取れず同士討ちなども含め300人ほどが戦死し、緒戦は菊池勢の圧勝に終わりました（⑤）。

この戦いで対峙した少弐頼尚と武光は、かつて針摺原の戦いで窮地に陥った頼尚を武光が救った間柄でした。数的に不利だった南朝方の武光は、そのとき頼尚から送られた「子孫七代に至るまで決して菊池に弓引くべからず」と書かれた血判状を自軍の旗の先にくくりつけ、頼尚の裏切りを知らしめることで兵たちの士気を高めました。

「大保原(大原)の合戦」とも呼ばれた筑後川の戦いの様子を描いた「筑後川合戦図」(三谷有信画／久留米市教育委員会蔵)

16代
菊池武政

父・武光のもと筑後川の戦いでも奮戦

15代 武光の嫡子で、1367年に肥後守となり、同時に菊池家の家督も継いだと考えられます。また、守山城(菊池本城)に惣領の本拠地を移したのもこの時期とされています。武光に従い果敢に戦いましたが、武光死去の翌年(1374年)に死去しました。

Kikuchi Takemasa

両軍合わせて10万人 関ケ原、川中島と並ぶ 大合戦ぼっ発！

大原古戦場碑

激しい戦いで散った兵たちへの鎮魂の碑

筑後川の戦いは、別名「大保原合戦(大原合戦とも)」と呼ばれました。現在の福岡県小郡市を中心に一大決戦が展開され、南北両軍合わせて2万5千人を超える死傷者を出す激戦だったと伝えられています。そのため、戦地となった一帯には彼らを供養したとされる場所やゆかりの地がいくつも残っていて、大原古戦場碑もその一つです。

宮ノ陣神社

懐良親王自ら植えたという言い伝えが残る梅

筑後川の戦いの際に、懐良親王がこの地に陣を置いたことが「宮ノ陣」という地名の由来といわれています。境内には親王が手植えしたことからその名が付いた「将軍梅」という紅梅があります。石囲いの中には5本の梅の木があり、最大のものは高さ約3m。市指定の天然記念物になっていて、3月上旬ごろから遅咲きの花を咲かせ、見る人を楽しませます。

耳納連山と筑後川

筑後川の戦いで武光が陣を構えた耳納連山。眼下には九州最大の河川・筑後川が流れます。

詳しくはコチラ！ 小郡市埋蔵文化財調査センターホームページ